青ざめた彷徨

志茂田景樹

青ざめた彷徨

志茂田景樹

中央公論社

青ざめた彷徨　定価一〇〇〇円

昭和五十七年五月十五日初版印刷
昭和五十七年五月二十五日初版発行
著　者　志茂田景樹
発行者　高　梨　茂
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 東京二―三四
印刷所　三晃印刷
製本所　小泉製本

Kageki Shimoda, printed in Japan
©1982 CHUOKORON-SHA, INC.

目次

第一章　見えざる岐路　5
第二章　無の時代　37
第三章　すね者の愉しさ　73
第四章　暗河のなかの光芒　110
第五章　積木の家庭　143
第六章　文学道場のピエロ　180
第七章　報われた帰結　213

装幀　吉田勝彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

青ざめた彷徨

第一章　見えざる岐路

それまで三年余にわたって信仰し、一時は寝食をわすれて布教活動に没頭した聖護道会の組織から、志水高男が離脱しようと決意したのは、昭和四十年の十月のことであった。

その月のなかば、志水は都下の三鷹市で建築業を営み、聖護道会では支部長をしている人物の家の一室にいた。十畳の和室で、正面に天井まで届きそうなほどに大きい、黒漆塗りの仏壇があり、その前で志水は正座して題目を唱えていた。

志水の背後には、二十四、五人の青年がいて、志水にあわせて唱題していた。その大半は二十代の独身者であったが、三十を過ぎた妻子持ちの男や、まだはたち前の少年も加わっていた。聖護道会は、日蓮門流のひとつである日蓮正宗の信者団体組織で、宗門とは別に独自の布教を行ない、宗門の容喙を許さない活動をくりひろげていたので、一般には独立した新興宗教団体として見られていた。

当時で公称五百万世帯を超えており、日本最大の新興宗教団体であった。その巨大組織をあげて三日前から聖本堂御供養と称する寄付金集めを行なっており、この日がその最終日であった。

聖本堂は日蓮正宗の本尊を祀る建物として富士山麓にある総本山内に建立されることになっているもので、計画ではローマのサン・ピエトロ大寺院を凌ぐ壮麗な大伽藍になるはずであった。その工事には八十億円とも百億円とも、また二百億円とも言われる、とにかく見当もつかない巨費を投じるというわさが組織の末端にまで流れており、それを四日間で集めることになっていた。

志水たちのいる支部長の家は、その寄付金集めの拠点として利用されていた。支部は八百世帯前後で成り立っており、婦人部、男子青年部、女子青年部、学生部などの各部に分かれて活動していた。

男子青年部で言えば、それぞれ百人前後の隊員をかかえる隊がふたつあり、志水はそのいっぽうの隊長であった。志水の背後にいる青年たちは、志水の隊の活動家たちで、これから最後の寄付金集めに出かけることになっており、その前に気持ちをひきしめることと、本尊に一円でも多くの寄付がとれるよう祈念するために、そろって題目を唱えているのである。

志水は、腕時計を見た。夕方の七時近くで、すでに二時間以上も唱題していた。志水は、仏壇の鉦を鳴らして、唱題の終了を告げた。背後の隊員たちは、とたんに唱題をやめて、合掌したまま、いっせいに深く頭をさげた。

志水は、鉦を鳴らしながら、三度ゆっくりと題目を唱えると、仏壇を背に隊員たちに向きなおった。

隊員たちは、頭をあげて、志水に視線を注いだ。どの顔にも深い憔悴の色がにじんでいたが、双眸だけは熱っぽい感じで輝いていた。

「――どうだ、生命力がついたか？」

志水がみんなを見わたしながら訊くと、はい、と元気のよい声がそろって返ってきた。

ひとりだけ、口を動かさず、暗い表情をしている者がいて、志水がにらみつけるとうつむいた。このなかでは唯一の妻帯者で、ちいさな広告会社に勤めている隊員であった。

志水の隊は三班に分かれており、それぞれの班がまたいくつかの分隊に分かれていた。分隊が男子青年部の最小の組織であった。

その広告会社員は、志水の隊で十六人いる分隊長のひとりであった。

「中西、女房のほう、どうなった？」

志水は、隊でもっとも年長の広告会社員に尋ねた。

「はい、どうもまだ……」

広告会社員は、うつむけた顔をいったんあげたが、口ごもると、また下を向いてしまった。

「信心が弱いからだ。題目を心をこめてあげていないからだ。きみのその信心が女房の心を御供養のほうに向けさせないのだ」

志水は、声を荒げて言った。

広告会社員の妻は、聖護道会の会員ではなかった。子どもを託児所に預けて共稼ぎをしており、志水はその広告会社員の口から夫婦の貯金が二百万円以上あることを聞いていた。

班長や分隊長を含めて活動家の隊員たちは、初日にすでに寄付を終っていたが、その広告会社員だけは妻の反対にあってまだ寄付をすませていなかった。

「あの貯金は絶対おろさない、と妻は言うんです。足の不自由な子どもの将来に備えて、節約に節約を重ねて貯めてきたものだから、と」

「中西分隊長」

少し前にいた、髪を短く詰めた、色黒の男が正座の膝を斜めにして広告会社員に棘を含んだ目を向けた。

班長のひとりで、精肉店員であった。広告会社員は、この精肉店員の班に所属していた。

「おれは、七十七万円、御供養したぞ。いつか独立するために、酒も煙草も飲まずに、こつこつと貯めてきた金だ。でも、こんどの御供養は最後の御供養だ、と会長先生もおっしゃられた。この御供養に精一杯の真心を尽くせば、なんでも望みが叶い、いまの境遇では考えられないほどの境遇になる。福運がつく。だから、貯金をはたいたんだ。それが信心というものだろう、ちがうか？」

精肉店員は、自分よりいくつも年長の広告会社員に頭ごなしに言った。

広告会社員はなにも言いかえさず、顔をあげてただ黙って精肉店員を見つめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なんだ、その目は。そういう信心だから、いつまで経ったって奥さんは信心しないんだ。子どもの足も治らないんだ。きみの分隊は、きみがそんなだから、まだ目標の半分もいっていないじゃないか」

精肉店員は、膝を少し進ませて詰め寄る気配を見せた。

「まあ待て」

と、志水は手を振って精肉店員を制して、

「とにかく、御本尊様に真心を見せるんだな。会長先生のお心に忠実であるかどうか、きみが宿命を転換できて、一家和楽の生活ができるようになり、子どもの足も治るかどうかは、そのひとつにかかっているんだ。わかるか？」

はい、広告会社員は、かぼそい声を出した。

「いまから帰って女房を説得するんだ。本気で命がけでやれば、かならず通じる。あしたの朝でいい。受付は終っているが、おれが言っといてやる。銀行へ行って貯金をおろして持ってこいよ。百五十万円は持ってこい」

いいな、と志水は念を押しながら、そう言っている自分が不思議で、それ以上にいまの自分が本性なのかそうでないのかと自分の胸を裂いて問いただしたくなった。

こんどの、組織がめらめらと燃えあがったような熱気のなかで行なわれている寄付金集めに対して、志水は批判的であった。貯金があればその貯金を、生命保険を契約していればそれを解約

して得た金を、貯金も生命保険もなければ、親兄弟に借金して手にした金を御供養するよう、幹部は会員が集まってさえいれば口をすっぱくして説いた。

そういう無理な寄付金集めは、広告会社員の例のように妻との不和を招いたり、親戚知人との摩擦を生じた。それでも、それを乗り越えて御供養することこそゆるぎない福運をつけ、いまの何倍何十倍に豊かな生活を送ることができるようになる、と強引に説いて金をはき出させているのが実情であった。

志水も自分の隊の者たちには、そう説得してしゃにむに金を集めている。自分では、いま組織で行なわれていること、自分のやっていることが狂ったことだと百も承知していながら、じっさいには金集めの最前線で陣頭指揮を演じている。

その自分は、ピエロなのか、性根の汚ない悪人なのか。そのあたりのことが自身のことなのに見きわめられず、もどかしく、そのため、志水は内心でひどくいらだっていた。そのいらだちを隊員に向けて出してしまい、本心とは裏腹のことばになって表われることが多かった。

聖本堂建立の寄付金集めに批判的になっているということは、聖護道会そのものに批判的になっていることであり、日蓮正宗の教義に疑いを抱くようになっていることであった。事実、いまの志水は会長の河田大介に対しても、本部のうち出す方針に対しても、教学部の教授が行なう月例講義の内容に対しても、その他のことについてもすべて批判の眼を向けていた。

そうであるのに、なお組織のなかでは、上から下りてくる命令を忠実に遂行し、隊員たちには

っぱをかけて金集めに奔走させていた。自己矛盾もはなはだしいが、そうした状態に陥っている理由に心あたりがないわけではなかった。

ひとつには、組織を離脱することに対する怖れとうっとうしさがあって、離れるに離れられずにいることであった。聖護道会では組織から離脱することを退転と言っているが、隊長ともなると退転すると、入れかわり立ちかわり、家庭にも職場にも上級幹部や同僚幹部が現れて、おどしすかしのことばを並べたてて組織にもどるよう説得するのである。正直に言って、それは強要であった。

他支部の隊長で、志水も顔を知っている者が以前、退転したことがあり、その後の状況をなにかのおりにその支部の人間から聞かされたことがある。職場におしかけるほか、電話がたえまなく鳴るほどの電話攻めも受けて、その隊長は居たたまれなくなって転職した。

その転職先にまでおしかけてこられ、電話も何人もからじゃんじゃんとかけられて、その新しい職場にもいられなくなった。そうして何度か転職をくりかえしているうちに、とうとう行方不明になってしまったという。

「――山奥の飯場で働いているのを見かけたという人間もいるようだね。退転した罰だ。幹部になればなるほど、退転して現れる罰は重い」

たぶん、おしかけたり、電話をかけたりした者のひとりである、その支部の人間は、本気でそう言い、口をゆがめて笑ったものであった。

そうした仕うちを受けることの怖れとうっとうしさが、志水の胸にはあった。

もうひとつ、離脱できない理由は、すでに三年余も組織にあって、盆も正月もなく活動してきた身には、その組織にいる以外に身の置き場がないといった妙な馴れが生じていて、批判や疑問とは別に組織のなかの人間関係や、生活環境を断ち、壊したくないという心理が働いていることであった。

組織から離れたら、強風にぷつんと糸の切れた凧のようにどこへ飛んでいくかわからないという不安があった。それだけ、聖護道会は、志水が入会してからの期間だけ見ても、一般世間がまるで動いていないように思えるほど、熱気の渦巻く世界であって、その渦巻きから出た自分がどうなるか志水には想像もできなかった。

離れるに離れられずにいる志水にとって残された道は、ただなにも考えずに前へ進むことであり、活動に熱中することであった。そのなかで考えていることがあるとすれば、金集めに好成績をおさめていい気持ちになってみたいという浅はかで、名誉心を駆り立てられる欲であった。志水の隊は、あたえられた目標の二百万円を二日目で突破して、三百万円に迫ろうとしていた。

ここで広告会社員の分隊長から百五十万円の寄付があれば、四百万円を軽く超えて、その金額は三多摩地区の隊のなかでは有数のものになるにちがいなかった。

「いいか、かならず持ってこいよ」

志水は、心臓をちくりと刺されたような良心の痛みをおぼえながら、そのことで逆に開きなお

って、また念を押した。

広告会社員は、ひどく疲れたような立ち方をして、足許をふらつかせながら部屋を出ていった。

廊下を隔てて、部屋がある。そこで女子青年部が集まって活動のうちあわせをはじめたらしく、きんきんした声が響いてきた。区長の声であった。男子青年部の隊に相当するものを女子青年部では区と言う。ちなみに、班はおなじだが、分隊に相当するものは、女子青年部では組と呼んでいる。

あわただしく廊下を走る足音がしたかと思うと、襖戸をあける音が伝わり、だれかがその部屋に入ったようすであった。区長のきんきん声の話が中断して、かわりに叫び声があがり、そのあと騒々しくなった。

志水たちのいる部屋の襖があけられて、二十三、四歳の、丸顔の女が顔を覗かせた。班長をしている花崎智子で、電子機器の部品をつくる工場に勤めていた。

「――岩下さんが、岩下さんが自殺したんだって。ガス管をくわえて、ビニール袋をかぶって死んだんですって！」

智子は、いまにも泣きだしそうな顔で、志水に言った。

「なんだって？」

志水は、思わず腰を浮かした。

ゆうべ見たばかりの、岩下という、智子の班に所属している若い女の顔が脳裏をよぎり、途中

で止まって消えなくなった。

なにかを言いたげにして、しかし、なにも言えずにおびえた顔であった。

前夜、それも午前零時になろうとするころ、おなじこの部屋で、志水は班長だけを集めてつぎの日の金集めの作戦を練っていた。聖本堂御供養の受付がはじまってから、三人の班長は仕事を休んで活動していた。自宅には寝に帰るぐらいで、自宅の離れている班長はこの家のどこかで寝泊りしているはずであった。

むろん、志水も仕事は休んでいた。

志水は、この年の春にC大の法学部を二年留年して卒業している。弁護士事務所に勤めて弁護資料を収集したり、整理したりするアルバイト的な仕事をしたが、一か月ほどでやめ、そのあと二回、転職して、いまはビル管理会社で事務をとっていた。

いまの会社に入る前の勤務先では、社内で折伏（しゃくぶく）と称する布教活動をしたり、他の活動のために欠勤したりして、それが重なって居づらくなり、やめている。隊にあたえられた折伏のノルマをはたそうとしてせっぱ詰まってやったことでもあるが、そのころはまだあまり自分のやっていることを疑わずにいたので臆することなく、社内で折伏を行なったのだった。

それがいまのところでは、親しくなった社員にも聖護道会の話はおくびにも出さなかった。折

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com